ペンを持とう！
集
ジャーナリスト
お母さんたちは…

顔」の連鎖が起こる。お母さんが笑顔になると、子どもや
ほど明快なことはないが、残念ながらわからない人という
スゴイ！」を伝える新しいJOB（職業）として、これから
・マザージャーナリストとは、たとえばこんなこと。

ンマザー

すべての子どもを笑顔に

Ａさんの子どもには障害がある。わが子の障害を受け止めきれず、迷いながらもＡさんはペンを持った。書くことは、自分を見つめることであり、覚悟を決めることでもあった。たくさんの人との出会いがＡさんの母力を上げ、今ではＦさん自身が人々の希望となった。すべての子どもたちが安心して生きられる社会をつくることが使命と気づかせてくれたのは、わが子。Ａさんは、福祉の新しい道を拓き始めている。

わが子へのレポート

Ｓさんは、わが子の日常を書き留め、地域版で発信。成長著しい子どもの一言、一挙手一投足は、宝物。だが残念ながらその記憶は、次第に薄れていってしまうもの。地域版は、別名「わが子へのレポート」といって、これがあれば10年後、20年後も記憶を蘇らせることができる。そこには、子どもだけでなく、母親の成長の足跡も。子どもが大きくなったら、プレゼントしたいと思っている。

UP

お母さん目線の食レポ

Ｅさんは、食べることが好き。素敵なお店を見つけては、いざ出陣。料理はもちろん、料理人やオーナーにもインタビュー。そんなＥさんが大切にしているのは、メニューや内装、スタッフのサービスなども含めた、お母さんや子どもにとってのいいお店。お母さんたちに共感されるＥさんの食レポは、店主たちにも好評で、Ｅさんには取材のリクエストやメニュー開発の依頼もくるようになった。

ンガを
る

Ｕさんは、子育てのちょっとした出来事や感動をイラストで表現。Ｕさんがつくる地域版の大半はマンガ。ネタをキャッチしたら、すかさずペンを持ちメモとスケッチ。客観的にわが子を見つめると、子どもには子どもの考えや理由があることに気づき、毎日が発見と感動の連続になった。いつしか子育てのイライラは消え、わが子への愛しさと子育ての楽しさに溢れる日々。これが、育児マンガ本にならないわけはない。

「お母さん大学」をつくるということ

お母さん大学は、カタチのない大学。校舎はなく、キャンパスは家庭。でも今は、その家庭にあるべき、お母さんの笑顔がない…。

だから、「お母さん大学」をつくりたくなった。

どんなにウェブで繋がっても、肌のぬくもりを感じることはできない。ウェブでは、言葉の向こうにあるお母さんの涙も笑顔も見えない。だから、手のぬくもりを感じる、カタチのある「お母さん大学」を。

森で伐採した木を運び、地元の大工さんにつくってもらう校舎は、木のぬくもりに溢れ、たくさんの親子を包み込む。畑では無農薬の野菜をつくり、味噌をつくる自給自足の生活。

教室はあっても、机に座っている時間はあまりない。学校には、お母さんやお父さん、ジジ、ババたちが来て、お団子をつくったり、縫物や編み物をしたり、薪割りをしたり…いろんなことを教えてくれる。外では子どもたちが木登りをしたり、かくれんぼをしたり…暗くなるまで走り回っている。大きい子が小さい子を守り、遊びもルールも教えてくれるから、大人の出番はほとんどない。

昼間は畑で汗をかき、わが子が寝静まった夜は、月を見ながら「母」を感じる。太陽と月のエネルギーで、「母力」がどんどん上がる。いっとき、本来の母に還る時間を体感する…そんな「お母さん大学」をつくりたい。

お母さんには、一人ぼーっと「孤独」を楽しむ時間と心の余裕が必要だ。今は、たくさんの情報や訳のわからない人に惑わされ、身も心もぼろぼろになっているお母さんが多い。ありのままの自分になろう。いいお母さんを演じる必要なんて何もない。

地元のお母さんはもちろん、日本中から、元気になりたいお母さんたちがやって来る。一日いれば笑顔になれて、１週間もいたら生き方が変わり、１か月いたら、そこに住みたくなる…そんな「お母さん大学」。

地元の方々へのお返しは、お母さんたちが笑顔で、いい子育てをすること。よく育てられた子は、いい人間に育つ。いい人間になれば、ふるさとを大切にし、町のために働いてくれるだろう。

カタチのない「お母さん大学」から、カタチある「お母さん大学」へ。百万母力プロジェクトとして、これから本格的に進めていく。その主役こそ、「ザ・マザージャーナリスト」たちなのだ。

（藤本裕子）

お母さんはスゴイ！を伝える
お母さん大学

お母さんの心を伝えること

「ザ・マザージャーナリスト」は、特別なお母さん？　いえ、普通のお母さんです。ちょっと違うのは、日々の生活の中でペンを持ち、アンテナを立て、さらに、自分自身のメディア（新聞）を持っていることです。

お母さん大学のお母さんたちがつくる「お母さん業界新聞地域版」はＢ４サイズ（両面）。小さな新聞だけど、世界にたった一つのわが子へのレポートであり、お母さんや地域の人たちを繋げるツールでもあります。そして、そのお母さんたちこそ、未来の子育て社会をつくる人。それが「マザージャーナリスト」です。

新聞づくりにこだわっているわけではありませんが、お母さんたちがつくっている地域版を読めば、何が大切かがよくわかります。お母さんの新聞には「お母さんの心」しかなく、今の時代、その「お母さんの心」が一番大切なのです。なぜなら、それが消えそうだから。

わが子を愛せない、子育てが楽しくない、子どもを産みたくない、わが子への虐待…。

確かにお母さんの中には、地縁、血縁もなく、孤立した子育て環境の中で子どもを育てている人もいます。でも、あえて言います。お母さんなら、どんな環境でもわが子を守る。それが母親です。

読者からよく言われるのが、「お母さん新聞に載っている人は、キラキラ輝いているお母さんばかり。見ているとそれが眩しすぎて、そうなれない自分に落ち込んで苦しくなる」と。正直、その言葉に、つくっている私も傷つきます。

でも「お母さん業界新聞」の中にあるお母さんのキラキラは、ただの輝きではありません。ありのままの、お母さん本来の輝きです。

そこにいるお母さんたちだってみんな、不安や不満もなく、子育てをしているわけではありません。子育てに悩みはつきものだし、大なり小なり悩みや問題を抱えているといってもいいでしょう。

でもそんな、決していいことばかりではない子育ての日々の中に、キラキラと輝くものを見つけ、それを見つけられた自分に、母である喜びを感じ、その喜びを仲間と分かち合っているお母さんたち…。むしろ、大変な問題を抱えている人ほど、お母さんの輝きを放っています。

10年前は少し違っていました。もちろん、お母さんを笑顔にするという、新聞の目的は変わらないのですが、当時は、子育てにがんじがらめになっているお母さんたちに、夢を描いてもらい、窮屈な「子育て」の枠の中で

爺（時事）川柳 ● 席譲り気まり悪そう中学生（手塚俊孝）

子育て川柳 ● 友チョコと言いつつハート男子用（八木橋真心）